



## 地域社会に求められる 多様な「人財」

会社を立ち上げて間もなく、都内の大きなお屋敷からの依頼を受け困惑した。「末期がんで余命幾ばくもない入院中の父を退院させ、生まれた家で最期を迎えさせたい」という長男と、そのご家族の強い要望だった。医療が必要な時間帯に合わせて看護職と介護職とが交互にシフトを組み、24時間体制で主治医と連携しながらケアを進めた。ベテラン看護師・熟練ヘルパーから新人まで、知識や年齢、言葉遣いや身なりもさまざまな総勢8人ほどからなるチームが、1日4交代で担当した。不安なままのスタートだったが、不思議なことに全員が在宅でのターミナルケアに関心をもち、熱意だけは十分あった。

数日後、その方をいちばん親身になって心配していたヘルパーが対応していた時間帯に息を引き取られた。明け方4時に亡くなったとの連絡が入り、私もすぐに駆けつけた。ご遺体はご家族に囲まれていた。恐る恐る、「あまりにも早くて残念です」と言ったとたん、「おかげさまで大好きな家で見送ることができました」と奥様に涙ながらに手を握られ、さらに「スタッフのみなさんはいい人ばかりで、とくに今日最後までいてくれた方が献身的な介護をしてくれました」と、こちらの想像以上に感謝された。

戸惑いながらもお祈りし、そっと故人の顔に手を当ててみた。実は、これが私が初めて目にした、そして初めて触れた遺体だった。スタッフに救われた気持ちがあった。そして、それまで介護の質をハイレベルに均一化しようとしていた考えが、どこか違うように感じ始めた。今から20年前、私が介護と保育の会社を設立した翌年で、30歳の時だった。

今でこそ訪問診療は普及してきたが、当時は往診しがなく、介護保険はそれから数年後の施行、民間での訪問看護ステーションの開設もまだ先のことであった。本人やご家族の望みどおりに「ご自宅で看取る」ことがどれだけ大変か。あのときいただいた感謝の言葉、そして、まるで神様でも拝むかのようにみつめられた

場面は、今も忘れることができない。

その後、介護業界は急速に拡大したが、最大の課題は、これまでもこれからも人材の確保だろう。性別や年齢、経験、性格などのほか、国籍までもが異なっても、人間味にあふれる心があれば、「人財」として人々の暮らしに寄り添えるのではないだろうか。

間もなく弊社は、保育と介護のノウハウを活かした認可保育所と小規模多機能居宅介護事業、そして地域の活動拠点となる区民協働スペースの複合施設を開設する。スタッフには保育士と介護福祉士等、両分野の資格を有する者を配置するなど、できるだけ子どもと高齢者の間の壁を取り除く。子どもの成長に、親以外の地域のさまざまな人たちが関わる機会をつくり、高齢者も子どもも互いに元気になるような多世代共生の場にしたいと考えている。

一方、数年前から関わらせていただいている高齢者住宅経営者連絡協議会も、多様な個性の集合体である。「社会福祉法人や財団法人等の非営利団体から上場企業まで、経営者や役員自らが知恵も体力も使い、高齢者のよりよい住まいづくりや環境づくりのために汗をかくという、何とも不思議な団体だ」とよく言われる。多忙ななかでも私たちは、この業界が少しでもよくなることを信じ、これからも高齢者の「終身にわたり尊厳ある暮らしを支える」ことを共通認識に活動していきたい。

### 西崎 修治

にしぎき・しゅうじ

#### ● PROFILE

ライフサポート株式会社代表取締役社長、高齢者住宅経営者連絡協議会幹事、東京成徳大学経営学部特別招聘教授。

